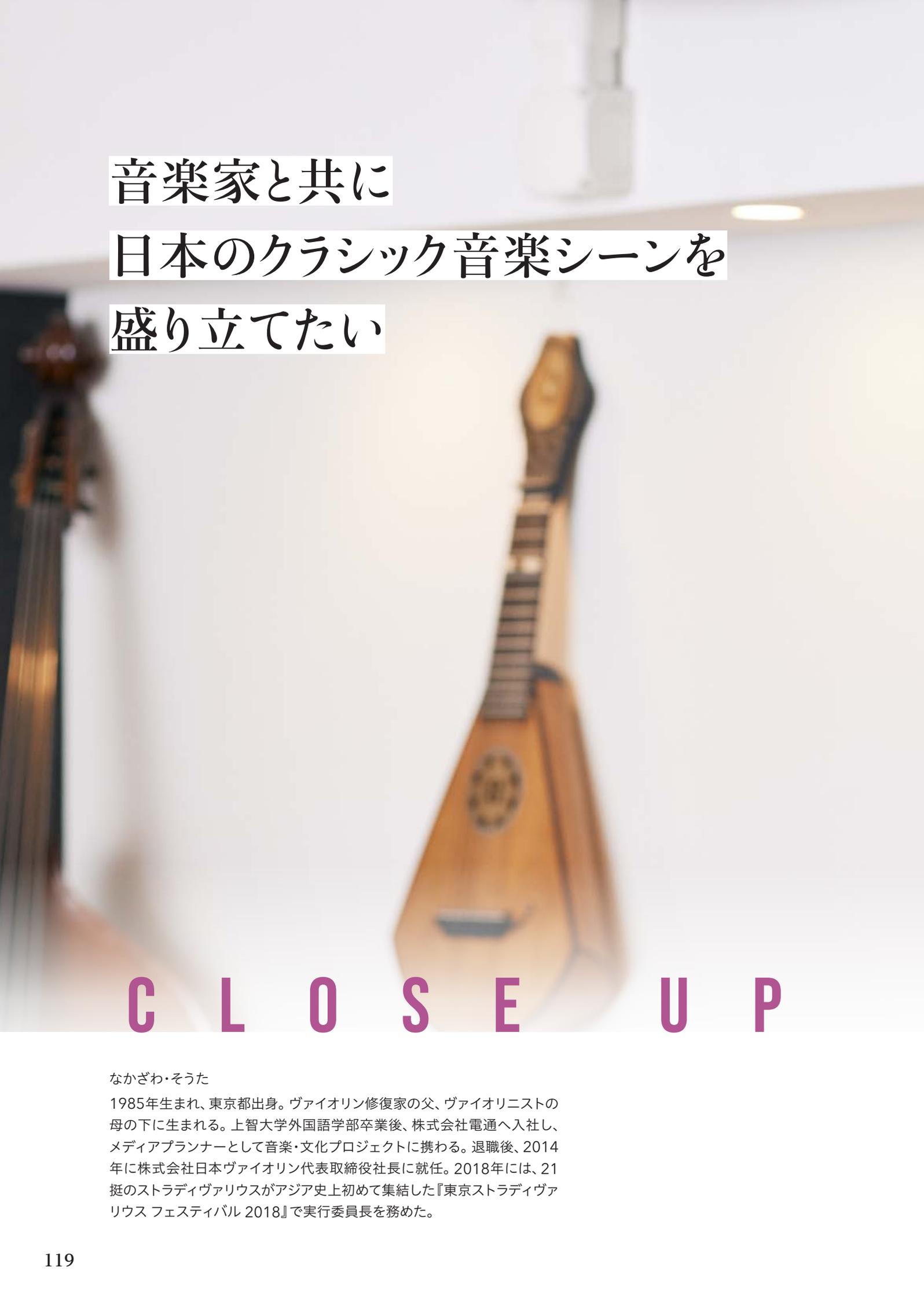




株式会社日本ヴァイオリン 代表取締役社長

中澤 創太さんに聞く

[聞き手] 外川 智恵さん 大正大学表現学部教授



音楽家と共に

日本のクラシック音楽シーンを

盛り立てたい

C L O S E U P

なかざわ・そうた

1985年生まれ、東京都出身。ヴァイオリン修復家の父、ヴァイオリニストの母の下に生まれる。上智大学外国語学部卒業後、株式会社電通へ入社し、メディアプランナーとして音楽・文化プロジェクトに携わる。退職後、2014年に株式会社日本ヴァイオリン代表取締役社長に就任。2018年には、21挺のストラディヴァリウスがアジア史上初めて集結した『東京ストラディヴァリウス フェスティバル 2018』で実行委員長を務めた。

ハイエンドな楽器をふさわしい人の手に

外川 本日、お話を伺いするのは、株式会社日本ヴァイオリン代表取締役社長の中澤創太さんです。中澤さんはお父さまがヴァイオリン修復家、お母さまがヴァイオリニストという音楽一家に生まれました。大学卒業後に民間企業を経て、2014年に株式会社日本ヴァイオリン代表取締役社長に就任。21挺のストラディヴァリウスがアジア史上初めて集結した『東京ストラディヴァリウスフェスティバル2018』では、実行委員長・代表キュレーターを務めるなど、クラシック音楽の分野でさまざまに活躍されています。今回、伺いたこのすてきな空間は、どのような場所なのでしょうか。

中澤 ここは、楽器の購入を希望される音楽家をお招きする部屋です。プライベートな空間でじっくり楽器と向き合ってもらうことが目的です。弦楽器の他にピアノも置いてありますので、音楽愛好家をお招きしてクローズドのコンサートを開催することもあります。

外川 中澤さんが代表を務められている日本ヴァイオリンについて教えていただけますでしょうか。

中澤 ヴァイオリン修復家である父が創業した会社で、一言でいうと楽器店なのですが、非常にハイエンドな弦楽器だけを取り扱っています。また、ただ販売するだけでなく、その楽器にふさわしい人の手に渡るような販売方法をとっています。他にも、CSR事業として音楽家へのヴァイオリンの無償貸与も行っています。

世界のクラシック音楽界で日本のプレゼンスを高めるために

外川 ヴァイオリンの無償貸与とはどのような事業なのでしょうか。

中澤 一つは、ヴァイオリン所有者と優れた演奏家を結び付け、無償で貸与していただく事業です。もう一つは、私のファミリーとして所有しているヴァイオリンがあるのですが、これは一切国外に出さずに、国内のヴァイオリニストに無償で貸与



外川 智恵さん

して使ってもらおうスタンスを貫いています。

外川 ヴァイオリンを貸与されるのはどのような方々なのですか。

中澤 岡本誠司さんや、辻彩奈さん、成田達輝さんといった30歳前後の若手ヴァイオリニストに使っていたいています。天才少女ヴァイオリニストとして知られるHIMARIさんには、分数サイズと呼ばれる子ども用のヴァイオリンなどを貸与してきました。

外川 ご活躍の方々に楽器を貸していらっしゃるのですね。

中澤 活躍してもらうために貸与している、という方が正しいですね。世界的に活躍できるヴァイオリニストになるためには、コンクールでタイトルを取らなければなりません。中でも国際コンクールとなると、皆一流の楽器で挑んできます。しかし、個人で一流の楽器を所有しているわけではなく、パトロンに借りて出場するのです。欧米などパトロン文化が進んでいる国では当たり前のことですが、日本ではそうはいきません。すると、ファイナリストが一流の楽器で演奏して競う中、日本人だけが鳴りの良くない一般的な楽器で挑むことになってしま

ます。残念ながら、この差があることで優勝できない事態が続いてきました。そうした現状を打破するために、コンクールに出場して才能が開花する可能性を秘めた方に楽器を貸与する事業を続けています。

外川 音楽家のサポートはいつからなさっているのですか。

中澤 父の代から音楽大学や芸術大学に進んだ若手音楽家に楽器を貸し出していました。その後、私の代になって貸与する音楽家の数を大きく増やしました。現在では、貸与した音楽家の人数は、延べ千人を超えています。

外川 どのような思いを込めて活動を支えていますか。

中澤 根本にあるのは、日本のクラシック音楽シーンを盛り上げたいという思いです。私は、クラシック音楽を支えるのはヴァイオリニストだと思っています。オーケストラの中でもコンサートマスターというキャプテン的なポジションは、ヴァイオリニストが務めます。現在、世



中澤 創太さん

界中にオーケストラがあることから分かるように、クラシック音楽の市場は想像以上に大きいのです。その中で日本がプレゼンスを高めていくには、日本のヴァイオリニストに世界で活躍してもらう必要があります。そのためにも優れた楽器は不可欠です。優れた楽器を弾いて世界中で活躍する才能ある音楽家を増やし、日本のクラシック音楽シーンをさらに上の段階に進めることが私の目標です。楽器を通して音楽家の人生に関与できることも、私にとって大きな喜びになっています。

外川 日本の文化を根底から変えたいという非常に大きなスケールの目標をお持ちなのですね。

中澤 弊社では必ず貸与することを条件に楽器を販売するケースが増えていますが、目標を実現するためには、弊社の取り組みだけでは限界があります。ヴァイオリンの貸与を希望している人は何百人もいるので、弊社が所有している楽器だけでは全く補いきれません。そのため、日本ヴァイオリンソサエティという会社を新たに作りました。いろいろな経営者の方々に参加していただき、ヴァイオリンを資産として購入してもらい、それを音楽家に貸与してもらうことを目的としています。また、経



営者と音楽家をつなぐことも私の重要な仕事になっていきます。音楽家に高額な楽器を貸し出すことには大きなリスクが付きまといまいます。何かの事故でヴァイオリンが壊れたら、億単位の価値がゼロになりますから。当然、それに備えて保険に入りますが、保険料も高額です。そうした事業に協力してもらうには、まず自分がやらなければ誰もついてきてくれません。ですから、今後も率先して貸与事業に取り組んでいきたいと考えています。

音楽に囲まれ育つ中で見えてきた進む道

外川 中澤さんの音楽家を支援したいという思いは、どのような環境で育まれてきたのでしょうか。

中澤 幼い頃から、日々の暮らしの中にずっと音楽がありました。例えば、夕食を家族だけで食べることはなく、いつも音楽大学の学生やヴァイオリニストとテーブルを囲んでいました。子どもの頃は不思議でしたが、後で考えると、そうして苦勞している音楽家を支えていたことが分かりました。そんな環境で育ったせいかな、自然と音楽家を支援したいという気持ち芽生えたのかもしれない

せん。現在も苦勞している音楽家は多いです。優れた才能があっても、経済的な負担は大きいですし、留学したくても高額な費用を準備できずに諦める方もいます。さらに一流の楽器を手に入れるとなると相当な負担です。そうした現実を見てみると、会社として何かしなければいけないという気持ちになります。

外川 中澤さんのお母さまはヴァイオリニストですね。ご自身が奏者を目指すことは考えなかったのでしょうか。

中澤 3歳からヴァイオリンを始めたのですが、母が先生だったため、同じように上手く弾けず悩んでしまったのです。そして、ヴァイオリン修復家である父の存在がありました。父の仕事柄、家中にヴァイオリンがありました。それが見て、触れて、聴くことの方が演奏するよりも好きだったのです。ですから、将来は奏者ではなく、ヴァイオリンの修理やメンテナンスをする仕事に携わるんだろうと子どもながらに思っていました。奏者にはなりませんでしたが、ヴァイオリンを習った経験は現在の仕事に生かされています。音色の粒がホールの隅々まで届くかどうかなど、楽器の良し悪しが分かりますので、自信を持ってお客さまにお薦めすることができます。

大学での学びを実践する

学業と仕事を両立した学生時代

外川 クラシック音楽の世界に携わる予感がありながら、上智大学外国語学部に進学されたのはなぜですか。

中澤 私は、高校はイギリスのボーディングスクールを卒業しました。その後、欧米の大学に進学することも考えていましたが、早めに帰国して知識や技術を引き継ぎたいという思いがあり、日本の大学への進学を決めました。上智大学を選んだのは、インターナショナルな気風を感じたからです。当時、すでに父の仕事を手伝っており、欧米に出張する機会が多かったため、英語に加え、第三言語を学びたいと考え、外国語学部ドイツ語学科に入學しました。

外川 お父さまのお仕事を手伝いながら、学生時代を過ごされたのですね。

中澤 海外出張が多かったので、スーツケースを持って大学に行くこともよくありました。ドイツ語学科の中で誰よりもドイツに行っていましたから、先生方も面白がってくれました。授業も実践的な内容でしたので、仕事で

も役立ちましたね。

外川 若者の中にも働きながら学業を修めたいと思っている人、早く社会に出たいと考えている人がいると思います。中澤さんから、そうした皆さんへアドバイスを頂きますでしょうか。

中澤 どの分野の学問であれ、ひたすら追求してみることをお勧めします。私自身、もう一度、大学に通いたいと思っています。私は仕事を通してさまざまな業界の経営者や研究者とコミュニケーションを取りますが、一定以上の知識や教養を持っていなければ会話が成り立ちません。また、海外の方と話す時には日本の政治や文化についてしっかり語ることができないといけません。ですから、大学でもっと勉強していろいろな知識を身に付けておけば、さらに仕事に生かせるのではないかと思うんです。また、学生時代にアルバイトやインターンを経験すると、早いうちから社会とのつながりをつくることができます。そうすると世の中を俯瞰することができ、自分が大学で学ぶべきことも見えてきます。学生時代に得られることは本当に多いと思います。

クラシック音楽は人とのつながりをつくる

外川 ところで、中澤さんは大学卒業後、すぐに家業を継がずに広告代理店に勤められましたね。

中澤 父の仕事を尊敬しており、いつかは継ぐことを考えていましたが、その前に社会で経験を積んでおきたいと思ったのです。実際、広告業界を経験したことで、クラシック業界を俯瞰することができるようになりました。「この手法はクラシック業界でも応用できる」、「この業界にはお金が集まっているのに、なぜクラシック業界には集まらないのだから



う」といった考え方ができるようになったのです。そうすると、早くクラシック業界に戻って、広告業界で得たアイデアを取り入れたいと思うようになりました。退職する前の2年間は、主に音楽に関わる仕事を担当していました。東日本大震災の後、音楽による復興支援イベントとして、スイスの「ルツェルン・フェスティバル」の開催を誘致し、そのために協賛企業を募るなどの仕事もしました。

外川 広告代理店でのご経験が生きたのですね。クラシック業界でのお仕事は順調に進まれたのですか。

中澤 それが苦勞の連続でした。私が家業を継いだばかりの頃、イタリアでヴァイオリンの製造に使う木材を取り扱う会社を運営していたのですが、現地法人でトラブルが発生し、イタリアでの訴訟問題にまで発展しました。ちょうど「東京ストラディヴァリウスフェスティバル2018」の開催を控えていたタイミングだったので、かなりの気苦勞がありました。

外川 ご苦勞を重ねて今日を迎えられているのですね。中澤さんのこれまでの取り組みを業界の先輩方も高く評価されているのではないのでしょうか。

中澤 弦楽器業界も狭くて古い業界ですから、僕が一番若手なんです。当初は「クラシック業界はこうあるべきだ」と苦言を頂いたこともありましたが、今は皆さんに応援していただいています。

外川 うれしいですね。苦勞してもクラシック業界を盛り上げたいというモチベーションの源泉を知りたくになりました。

中澤 やはり楽しいからですね。広告代理店を辞めて家業を継いだ時は、またクラシック音楽にすっかり携われることがとてもうれしかったのを覚えています。音楽を通して、年齢や国籍、立場を超えて人とつながることができるんです。ヴァイオリンを通じて知り合った人たちは、私にとって大切な宝になっています。クラシック音楽はコミュニティをつくってくれる存在です。音楽家同士で共演することはもちろん、「今日の演奏は良かったね」とオーディエンス同士で感動を共有してつながることもできます。さらに、それが国境を超えて国際的なつながりもつくり出します。私が主催するコンサートには、経営者の方々もお招きしていますが、裕福でいろいろな経験をしてきた彼らが演奏を聴いて、「こんなすてきな

体験は初めてだ」と感動してくれます。本物のヴァイオリンの演奏を聞いたことがない人はまだまだ世の中に多くいます。その人たちにぜひクラシック音楽を知ってもらい、コミュニティをつくってほしい。そうして幸せになる人が増えることを願っています。

クラシック音楽の裾野を広げるために

外川 残念なことに、クラシック音楽に対してハードルの高さを感じている人もいらっしゃいます。そういう人たちにクラシック音楽の魅力を知っていただきたいですね。

中澤 私はクラシック業界を支えるファン層が広がっていない現状を危惧しています。クラシック音楽について、最初に違和感を覚えたのは小学校の時です。当時、母からヴァイオリンを習っていたのですが、そのことを学校で話すととても驚かれました。中学校に進んでもヴァイオリンを弾いているのは、学年で私ともう1人の2人だけ。なんだかヴァイオリンを弾いていること自体が恥ずかしくなったのを覚えています。その時期に「クラシック音楽は若い人たちの間で流行っていないんだな」と実

感じました。現在、クラシックコンサートの観客の平均年齢は非常に高くなっています。このため、長年ファンとして支えてくれていた観客数も年を重ねるごとに減少し、経営が危ぶまれているオーケストラも出てきています。

残念ながら、日本ではそうした寄付文化が欧米に比べて50年も100年も遅れています。若い音楽家が活躍すること、そうした現状を変えてくれることを期待しています。

業界全体が焦りを感じていますが、まだ手遅れではないと私は考えています。クラシック業界を守っていくには、私たちの世代、そしてさらに若い世代に裾野を広げていかねばなりません。そのためにも、若手音楽家にヴァイオリンを貸し出して、世界的に活躍してもらうことが重要なのです。

そしてもう一つ、クラシック音楽にハードルの高さを感じてしまう原因の一つが、チケット料金が高額なことにあります。しかし、欧米ではとても安いんです。なぜかという点、オーケストラに対する寄付金額が非常に多いのです。例えばアメリカではオーケストラやホールに寄付をすると、全額が税金の控除対象になります。ですから多くの企業が億単位で寄付をするわけです。



外川 会社の展望があればお聞かせください。

中澤 日本ヴァイオリンを世界的な楽器店にしたいと思っています。欧米にはメガディーラーと呼ばれる楽器店があって、世界的な一流の奏者に楽器を貸与しています。現在、日本、アジアでは業界トップを走らせていただいています。日本の音楽家たちと共に、その域にまで成長していきたいですね。

外川 私も長年ラジオでクラシック音楽の番組を担当してきましたが、もっと気軽に音楽の魅力を多くの人に知ってもらいたいと思っています。中澤さんの取り組みが実を結び、日本のクラシック音楽業界がさらに盛り上がることを楽しみにしています。本日はありがとうございました。